

# 創刊に寄せて《新しき皮袋に新しき酒を》

人間学部長 小花和 昭介

人間学部発足の初年度にあたり、ここに「人間学部紀要」を創刊いたしますことは、われわれ研究者の大きな喜びであります。刮目に値する創造的な論文が数多く寄せられ、この紀要が広く本学部の存在を誇示する学術誌となることを念願いたしております。

この機会に、私見をお許しいただいて、新学部紀要の求心的役割について提言してみたいと思います。人間の統合的・経験科学的理解を標榜し、そこに学部アイデンティティを求めて設立された本学部は、その標榜どおりに、個別諸科学の加算的寄せ集めでない統合性を実現するという課題を負っております。それは、ある意味では永遠の課題かも知れませんが、その実現に向けての努力こそが、教育と研究の両面において新学風を樹立する基盤でありましょう。人間学部は、哲学、心理学、社会学、教育学、生物学、体育学の専門家を擁し、それぞれはまた細分化された専門領域をもっております。新紀要が、各専門領域が打ち上げる華麗な花火の単なる寄せ集めでは、人間学部とは何なのかという問いに答えられますまい。

その意味で、この紀要の果たすべき役割は、ことさらに大きく重いと申さねばなりません。それは、広く研究成果を世に問うという紀要の当然の役割のほかに、諸研究をして人間の統合的理解というところに収斂させ、もって新学部のアイデンティティの確立に寄与するという役割を合わせもっている、と考えるからであります。前者を遠心性の機能とすれば、後者は求心性の機能であります。この両機能は、すべての紀要や学術雑誌に多かれ少なかれ見られるものではありましょうが、しかし新学風の樹立を促す契機としての新紀要については、その求心的な役割を特に再認識しなければなるまいと思います。

具体的には、たとえば誌上討論や特集テーマの設定や、あるいは紀要論文を問題提起としたシンポジウムの企画などが考えられましょう。要は、世上に多く見られるいわゆる「書きっぱなしの紀要」にない創意工夫であります。学問研究の自主と自由を前提としてそういう新企画を論ずるところに特殊な困難が伴いましょうが、それが、新しく出発した学部の草創期の課題であろうと思います。

新しき皮袋は、すでに用意されました。ここにどうい酒を盛るかが、これから真摯に論じられなければなりません。今はまだ、組織や諸制度が動き出したところであります。学部の衆知を結集して人間学部の内実を建設し、新学風を生み出すために、「人間学部紀要」の果たす役割に期待するところ絶大であります。

1995年12月